



# Caritas Kaleidoscope

カリタス女子短期大学

英語・英語圏文化専攻

Vol. 7

## Summer School in UK, 2002

英語・英語圏文化専攻 教員

Patricia Yasuda



**Llandrillo College**

This summer's Study Abroad programme was held in North Wales which is a very beautiful part of Britain with green hills and lovely coastal views.

We studied there for five weeks in classes with students from several countries including China and Slovakia. In the afternoons and on weekends, we experienced sightseeing trips or outdoor activities such as horse-riding.

Here are some comments from two students who joined the programme .

### From Mio Asano

I stayed with a small family for five weeks with my classmate. There were two people in my host family - host mother and her son of eight years.

I was really a lucky girl to be placed with that family by the school counselor. They were nice people and my host mother could speak six languages: Welsh, English, French, and Spanish etc. So she gave us advice about the best way to learn English.

Our college life was busy so that we had little opportunity to talk with our host family. But my host mother took us to many places to learn British culture. We went to the horse races, a pub and to see a Shakespeare play. The little boy also helped us to learn English and culture. He taught us about the map of Britain. He was my little English teacher!

It's been the best summer I've ever had in my life. I realized I changed much during the five weeks I was in Wales. And, I've made a fresh determination to master English!

### From Aiko Yamamoto

This summer, I went to the U.K. for the first time. In Llandrillo College, we were divided into four classes. I was in the top class, so it was very difficult to catch what teachers and other students were saying to me.

The other students were from China, Spain, Czech, Vietnam and Russia.

We learned so many things like appearance, useful phrasal verbs, vocabulary and patterns. We also did a presentation of our own country and played some games, too.

The thing I enjoyed most with my classmates was chatting with them. Sometimes I could not communicate with them in English, but when I could communicate and understand them, I felt very happy. It was very interesting for me to know other cultures.

I found that studying in the U.K. made me want to study English more!!



# 英米文学の故郷

## 第7回 ロレンス・カントリー

英語・英語圏文化専攻 教員

伊藤 知子



D・H・ロレンス

D.H. ロレンス(David Herbert Lawrence, 1885-1930)は性や愛について独自の考えを持ち、人間性の回復を主張した小説家、詩人です。ロレンス・カントリーとはイングランド中部、ノッティンガムシャー(Nottinghamshire)の炭坑町イーストウッド(Eastwood)を中心として、州都ノッティンガム(Nottingham)を含めたロレンスにゆかりの地域です。彼の小説には自伝的要素が見られ、その背景として故郷ノッティンガムシャーの自然や人々が描かれています。



ロレンスが生まれたイーストウッドはノッティンガムから北西へ約 15 キロのところにあります。彼の小説では『息子と恋人』(Sons and Lovers, 1913)や『恋する女たち』(Women in Love, 1920)等の舞台になっています。生家(1885-1887)はヴィクトリア・ストリート(Victoria Street) 8A 番地にあります。赤煉瓦の家は修復保存されて D.H.Lawrence Birthplace Museum(D.H.ロレンス生誕地博物館)となっています。当時の家具や生活用具を見ながら、炭坑夫を父として労働者の家庭に生まれたロレンスの幼年時代に思いを馳せました。2番目の家(1887-1891)はガーデン・ロード(Garden Road)28 番地にあり、3番目の家(1891-1902)はウォーカー・ストリート(Walker Street) 8番地にあり、4番目の家(1902-1911)はリンクロフト(Lynncroft)97 番地にあります。『チャタレイ夫人の恋人』(Lady Chatterley's Lover, 1928)においてコニー(Connie)と森番メラズ(Mellors)が出会う森のモデルになったのはハイ・パークの森(High Park Wood)です。ノッティンガムにはロレンスが奨学金を得て通ったノッティンガム・ハイスクールと教員になるために進学したユニヴァーシティ・カレッジ(University College、現在のノッティンガム大学)があります。ノッティンガムシャーを訪れたのは1997年の3月でした。戸外を歩くにはまだ寒かったのですが、あちらこちらに黄色いラッパ水仙が咲いていて春の息吹を感じました。



ハイ・パークの森

# 留学生座談会2002

英語・英語圏文化専攻 教員

北川 宣子



林こづえさん



小泉美琴さん



周東雅子さん

長期派遣奨学生として1年間の留学を終え、この夏に帰国した3名の2年生を囲み、恒例の座談会を開きました。留学中に学んだこと、楽しかったこと、苦労したことなどを中心に話していただきました。

教員： まず皆さん、お帰りなさい。今日は、それぞれの体験の中で特に印象に残ったことを自由に話してください。

林こづえ(以下H)： 私はホームステイをしながら、イギリスのチチェスターカレッジに通いました。学生数も多く、自由なカレッジで先生とも友達のように親しく話せる雰囲気のところでした。宿題は勿論しっかりやりましたが、その後に友達と楽しむ時間をいっぱい作りました。

教員： どんなことをして楽しんだのですか？

H： 特に International students 同士の交流が盛んで、皆でパブに行ったりして、いろいろと話したことがとても楽しいひとときでした。ヨーロッパの留学生も多かったので、長い休みには違う国の友達の家を尋ねたりもしました。

小泉美琴(以下K)： 私はイギリス・ストック・オン・トレントのスタッフォードシャー大学で勉強しました。クラスにはいろいろな年代の人がいておもしろかったです。ホームステイ先にはかわいい3歳の女の子がいて、いい英語の勉強にもなりました。授業以外で特に楽しかったことはやはり友達の家に行っておしゃべりできたことです。

教員：何か英語以外のコースを取りましたか？

K：ESLの上のクラスでは他の科目を取ることもできましたが、私は英語にひたすら専念しました。

教員：その中からどんなことを得ましたか？

K：イギリスの文化はもちろんですが、留学生同士の交流の中でたくさんの文化に触れられたことがとてもためになったと思います。

周東雅子(以下 S)：私もホームステイをしながらカナダ・ビクトリアのカモーンソクカレッジに通いました。町はちょっと歩けば友達に会うような小さな町です。最初の学期は細かくクラス分けがしてあるESLで勉強し、その後、College Prep.(Preparation) Courseに行くことができました。

教員：それはどんなコースですか？

S：ヴィクトリア大学に入学するための準備コースです。留学中にこのコースを修了できたので、カリタスを卒業したらまたカナダに戻って、ヴィクトリア大学に進学したいと思っています。

教員：自分の進路につなげることができてよかったですね。これから、じっくりと一年間の留学の成果が出てくると思いますが、皆さんの将来に役立つことを祈っています。今日はいろいろ聞かせていただき、ありがとうございました。後期をおおいに期待しています。



## 先生が学生だった頃

このコーナーでは、カリタス女子短大の先生方がどのような学生時代を送ったのか、学生によるインタビュー形式でお届けします。第7回目のゲストは、英語・英語圏文化専攻の吉成征一先生です。先生は主に教職課程の科目を担当なさっています。インタビュアーは1年生の櫻田美鈴さんです。



吉成 征一先生

**Q1. 先生は早稲田大学のご出身でいらっしゃいますが、何を専攻されたのですか？**

学部・国文科です。言語が好きで、特に文学に関心がありました。高校時代の愛読書は、『ハムレット』と『吾輩は猫である』で、何度も読み返しました。

**Q2. 先生のその当時の将来の夢は何だったのですか？**

ジャーナリストになることでした。当時の大学生はそれが一般的だったんですよ。もちろん、文学が好きだったから、というのもありますね。

**Q3. では、先生はなぜ教師になられたのですか？また影響を受けた先生はいらっしゃいましたか？**

影響を受けた先生はいませんでした。大学で学んだことを活かしたかったから教師になったのです。

**Q4. 現在、先生は教職科目を担当していらっしゃいますが、これからの教師には何が不可欠だと思われますか？**

知識と情熱ですね。どちらが欠けても駄目だと思います。そして、日本の将来を背負う子供のためにしっかりと教育をすることです。

**Q5. 先生の考える「立派な人間」とはどのような人のことですか？**

その人の能力に応じた社会貢献が出来ること、そして人に対して愛情をもって接することですね。他人に迷惑をかけなければ良いと思うだけでなく、もう一歩先を見る必要があると思います。

**Q6. 最後に学生へメッセージをお願いします**

自分のやりたいことをやり通し、そして悔いのないように充実した生活を送るように、しっかり勉強して卒業して下さい。

# えいがのえいご & == Cool Web Site ==

英語・英語圏文化専攻 教員  
石塚 美佳 前田 隆子



今回の台詞は1989年に公開された「赤毛のアン」(“Anne of Green Gables”)から紹介します。この作品は、ルーシー・M・モンゴメリ原作の同名小説を映画化したものです。以下は、アンが親友のダイアナにわざとお酒を飲ませたと疑われてしまい、そんなアンをステイシー先生がなぐさめるシーンでの台詞です。

Ms. Stacy: As far as the truth goes, don't lose heart. Diana will always be your friend.

No matter what anyone accuses you of, in the end, the truth will set you free.”

Anne: “The truth will set you free.”

ステイシー： 真実に関して言えば、がっかりしないことよ。ダイアナはずっとあなたの友達でいてくれますから。

どんなに疑いがかけられていても、やがては真実があなたを自由にしてくれるでしょう。

アン： 「真実が自由にしてくれる」ね。

の lose heart は「がっかりする、落胆する」という意味ですが、似たような表現で lose one's heart to + [人] となると「(人)に思いを寄せる」という全く別の意味になります。 の表現はもともと聖書にある表現で、新約聖書のヨハネによる福音書8章31～32節からきています。「To the Jews who had believed him, Jesus said, “If you hold to my teaching, you are really my disciples. Then you will know the truth, and the truth will set you free.”」(HOLY BIBLE New International Version) イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」(1988年 新共同訳)

カナダのプリンスエドワード島の美しい風景と、アンと周囲の人々の心温まる交流がとても印象的な映画です。現在日本でも映画「赤毛のアン アン結婚」が公開されていますが、すっかり大人の女性に成長したアンを再びスクリーンで見るといいですね。

そして今回ご紹介する Web サイトは、『赤毛のアン』の翻訳でも知られている、作家 松本侑子さんのホームページです。こちらには、モンゴメリが『赤毛のアン』シリーズに引用した英米詩の原文が紹介されている、「モンゴメリ・デジタル・ライブラリ」のコーナーがあります。英米詩の原文に触れながら、赤毛のアンの世界をもう一度楽しんでみてはいかがでしょうか。

インターネットアドレス：松本侑子ホームページ

<http://member.nifty.ne.jp/office-matsumoto>

Kaleidoscope 第7号はいかがでしたか？ 皆さまのご意見・ご希望・ご質問など、お気づきの点を [maeda@caritas.ac.jp](mailto:maeda@caritas.ac.jp) までお寄せください。

2002年10月10日発行

発行責任者： 北川宣子

編集協力&タイトル・ロゴ作成：

東京工科大学メディア学部 渡邊賢悟

カリタス女子短期大学

Caritas Junior College

〒225-0011

横浜市青葉区あざみ野 2-29-1

Tel:045-901-5133

Fax:045-901-5066

URL: <http://www.caritas.ac.jp/english>